

『紅毛雑話』攷

——成立・受容・位置づけなど——

石 上 敏

一、はじめに

『紅毛雑話』（天明七年刊）は、数ある森島中良の著述の中でも、名実ともにその代表作と呼ぶべき本のひとつである。近世期以来の中良の著作書目に必ず載り、近代の中良論にも、ほとんど例外なく言及されるのが常であった。^{〔1〕}

この『紅毛雑話』を当代の学芸ジャンルの内に分類するならば、もちろん蘭学から派生した成果と呼んでよいのであろうが、一方でこれをあくまでも「本」として分類するならば、蘭学啓蒙書、あるいは海外知識啓蒙随筆と呼ぶことが適当であろう。その編述方法のみに注目するならば考証随筆と呼ぶことすらできる。^{〔2〕} 単なる蘭学書とは異なつた啓蒙の姿勢こそが、この書の大きな特徴と呼ぶべき要素であつた。

半紙本五巻五冊というその体裁は、明らかに學術書、当時の呼称に基づけば「物の本」のスタイルであつた。そして本書は、それまで存分に俗文芸に遊んだ森島中良がはじめて著した物の本で

もあつた。もちろん袋入りで売られたものと思われる。実際に袋入りであつたと記す証言もあるが、筆者はその袋は未見である。おそらく、通例から考えて後摺本で見返しとして用いられた板面が、当初の袋の意匠であつたものかと考えられる。

中良の著述の流れの中で、戯作本から學術書への端境期に位置するということもあり、天明七年（一七八七）という、いわば「転向」の時期に書かれたということもあつて、この『紅毛雑話』には問題とすべき要素が未だに少なからず残っている。以下本稿では、この『紅毛雑話』について、従来触れられることのなかつた側面を中心に考察を試みて行きたい。

二、成立

『紅毛雑話』は、天明七年（一七八七）九月二十六日に「紅毛雑話 森嶋中吉作」（『割印帳』）として不時割印を受け、板行された。その後、寛政八年（一七九六）五月に大坂（塩屋喜助）に求板される。以後、刊年の明記されたものだけでも、文化十三年

(一八二六)板、文政三年(一八二〇)板、同十一年板(河内屋直助)、嘉永三年(一八五〇)板と摺りを重ねた。これらの他にも刊年不明の板が複数存在し、相当の流布が確認される。⁽⁵⁾ある時期『名所図会 阿蘭陀紀聞』と改題され(ただし題簽のみ。内題・序題などは「紅毛雑話」のまま)、この外題で板行されたこともあるが、おそらくこれは一時的なもので、すぐに「紅毛雑話」に復題されたものと思われる。⁽⁶⁾

天明七年の「夏」(四―六月)に大槻玄沢が「紅毛雑話」序を撰しているところから、草稿はその頃に成立したものと考えられる。その玄沢序文中には、「君天資穎敏、学は和漢に渡り、才は述作に妙にして、口を開けば華を吐き、筆を手に入れば則ち文点(々)として更めず」(原文)という至言を収める。この言を以てすれば、本書の著者を一言のもとに立ちどころに説き得るであろうと至評といつてよい。

やや後れて「秋」(七―九月)に宇田川玄随が後序を、「季秋」(九月)十三日に実兄の桂川甫周が序を撰している。続く前野良庵の跋に日付・季節などは一切記されないものの、この頃の撰と考えて大過あるまい。

そして、この九月に「紅毛雑話」は半紙本五巻五冊の形で、北尾政美・司馬江漢・北山凡泥龜らといった絵師たちの挿画に中良の自画を加え、須原屋市兵衛の板として刊行されたものと考えてよいだろう。玄沢の序文(夏)が成立を見越したもので、玄随の

後序(秋)や甫周の序文(季秋)が成立時のものという可能性も考えられるものの、おそらく玄沢の日付は草稿成立段階のもの、甫周・玄随の日付は板下(完成稿)成立時点のものと考えた方が妥当であろう。先に想定したように、玄沢序の日付(板行時期との時間的距離から見ても、この「夏」とはおそらく六月頃ではあるまいか)の頃に「紅毛雑話」の草稿は成立したものと考えておいてよいだろう。

ところで、なぜ玄沢が「紅毛雑話」の草稿を最も早く見得たのかといえば、その成立に最も深く関与したのが玄沢であったからにはならない。中良にとつても、啓蒙書とはいえ最初の学術関連の著書であり、完成稿以前に玄沢の校閲を依頼しつつ一説を乞い、その折りに玄沢に序文を求めたものと類推される。成稿以前未だ草稿段階にあるそれぞれの原稿を、中良と玄沢とが互いに貸し借りしていた事実のあったことは、すでに別のところでその事例を挙げて考察した通りである。⁽⁷⁾それほど、当時中良と玄沢とは親しい関係にあった。

「紅毛雑話」の作者署名は、内題下に「森嶋中良」、本文中の挿絵部分に「万象亭主人(印)記象」と見える。中良が、未だ桂川ではなく森島を称していた時期のものであるから、これらの署名に関して問題はない。間違ひなく天明七年の成稿であったと考えられる。「記象」の戯印は、彼が天明期を通じて専ら戯作に用いて来たもので、「紅毛雑話」の他には、これ以前にも以後も

學術書の範疇に収まる本には用いていない。啓蒙的姿勢によって編まれた學術書とはいえ、時は天明戯作の盛期かつ晩期であり、著者の気分としては楽しんで書いており、中良自身が「雅俗粉雜」(自序)と述べる通り、雅と俗、あるいは學術と趣味の中間的な書物であったと見受けられる。そのようなところにも、本書が洒脱で垢抜けた本に仕上がっている要因があったと言えるだろう。

文章(文体)としては、これ以後に書かれる他の中良の半紙本類(物の本)と変わったところはなく、彼が一般向けにも読みやすい達意の文章を心掛けていることが明確に窺える。その板面は、先蹤となった後藤梨春の「紅毛談」などを踏襲しつつ、むしろ『万国新話』「琉球談」といった自作を含む後続の類書の基準を形成した。その凡例もまた、『万国新話』などの自作にとどまらず、後続の類書の踏襲するところとなった。

その巻末には、「西洋奇談・万象雜組」の予告が付されるが、いずれも未刊に終わったものと思われる。この時(天明七年九月時点)の嗣出予定書上記二点は、寛政元年(一七八九)十一月刊の『万国新話』では「西洋奇譚・万象雜組・万国新話(ヨーロッパの部・アフリカの部・アメリカの部)」・大日本地名便覧・農工力軍」の五点に、さらに寛政二年九月刊の『琉球談』においては「琉球談・朝鮮談・万国新話(ヨーロッパの部・アフリカの部・アメリカの部)」・紅毛智恵洋・西洋奇談・万象雜組・日本地名便覧・農工力ぐるま」と、既刊分を含めて八点へと拡充されるが、『万

国新話』のアジア編、『琉球談』、『日本地名便覧』を除いて、いずれも板行された形跡を見ない。それは、これらの嗣出予告が、この時期の近刊予告によくあるような空手形であったからではなく、あくまでも外的な阻害要因によって、結果的に板行が叶わなかったものと考えられる。それは具体的には寛政四年からの中良の白河藩への仕官を指すが、これが一部にそのような説のあるように中良に対する言論封殺の意味を持ったのかどうかは、現存する資料の範囲のみから判断して、断言できるまでには至らない。

中断のやむなきに至ったそれらの嗣出予定書の草稿の一部と思われる痕跡は中良の書留帳類に残り、未刊の背景には中良の成稿・板行の断念をもたらした事情が想定されるのであるが、この点については、現段階では詳細不明としておく以外にない。

ちなみに、例えば、巻一「アジア誌」・巻二「ヨーロッパ誌」・巻三「フリカ誌」・巻四「南アメリカ誌」・巻五「北アメリカ誌」・巻五「オーストラリア誌」という構成から成る「坤輿図識」が纂作阮甫の手で編まれたのが弘化年間(一八四四―四七年)のことであった。『琉球談』の巻末嗣出予告に見る構想は、まさにこのような半世紀後の構想を先取りするものであり、海外事情・情報に対する寛政初年当時の環境から考えるならば、いかにも時代を先取りした(時期尚早な)構想であったといえる。その意味では、中良もまた師匠の平賀源内と同じく「早く来すぎた者」のひとりであった。

三、『万国新話』との関係

『紅毛雑話』の姉妹編、あるいは後編的な位置を占める書物として、従来しばしば『万国新話』の名が挙げられてきた。⁽⁹⁾ これもまた、蘭学啓蒙書・海外知識啓蒙随筆と呼ぶべきその内容・構成は、ほぼ『紅毛雑話』と径庭なく、『紅毛雑話』より二年後の寛政元年（一七八九）九月九日に成立している。その署名もまた、例引に「万象亭主人」と見え、ジャンルによって名号を使い分ける傾向のある中良にとって、これらが同じ気分の中に著された本であったことを示している。前野良庵、桂川甫周、宇田川玄随と序を撰する面々も、『紅毛雑話』と重なっている。さらに半紙本五巻五冊という体裁、北山凡泥亀という画工と、その挿絵の様子さらに須原屋市兵衛板という板元の共通などと、『紅毛雑話』と『万国新話』との間には共通項が少なくない。この他にも、『万国新話』の「例引」（凡例）には「書中の地名、皆明儒の釈字を用ゆ。釈字なきものは国字にて書する事紅毛雑話の例の如し」などという一条があり、『紅毛雑話』との連接を窺わせるのである。

さらにまた、寛政十二年（一七九〇）七月に至り、『万国新話』は大坂の浅野弥兵衛に求板され、以後、河内屋新次郎などの手を転々としつつ大坂で摺りを重ねる。⁽¹⁰⁾ 即ち、『紅毛雑話』の板木の移動とよく似た経路を描いていると言えよう。

これらいくつかの側面から見ても、『万国新話』を指して『紅毛雑話』の続編と言われてきたことにも、それなりの理由

が存したわけである。ただし中良本人は『万国新話』を『紅毛雑話』の続編と位置づけていたわけではなく、それぞれが、以後に続くはずであった世界地誌のシリーズと西洋情報シリーズの第一作として書かれたのである。『万国新話』の続編は、先に見た通りヨーロッパ・アフリカ・アメリカの各編として構想され、『紅毛雑話』の続編は、近刊予告に「紅毛雑話の後編」と明記する「西洋奇譚」が準備されつつあった。巻次や装丁などを見ても、『万国新話』が『紅毛雑話』の続編として書かれ、刊されたものでないことは明らかである。

ところで、『万国新話』の表題の「新話」とは、『紅毛雑話』の外題が「雑話」（「雑然とした話題」「雑多な情報」と卑下した姿勢とは異なり、あくまでもポジティブに「新しい話」「新情報」の意味であっただろう。またこの書名は、『万国新話』本文中にも見える『万国図説』（明儒訳）や『万国地図』（紅毛模板）などを意識したものであったはずである。そして、その上で『紅毛雑話』との対応も意識されていただろう。

先に見た通り、『万国新話』の「例引」には、本文の表記を『紅毛雑話』の例の如し」と『紅毛雑話』の凡例に準拠する旨が記されるが、これはあくまでも表記に関して先行の自著である『紅毛雑話』の名を挙げただけであり、『万国新話』が『紅毛雑話』の続編であることを意味するものではない。このような表記への配慮は、『琉球談』を経て、オランダ語の語彙集である『類聚紅毛語訳』

（寛政十年成）にも流れ至っている。そこでは、『紅毛雑誌』『万国新話』の刊行からは十年近く隔たっていることもあり、中良が両書の名を出すことはしないけれども、両書と同様の表記法がとられている。

そもそも『紅毛雑誌』と『万国新話』の内容に関する編述方法自体が異なっていることは、かつて考察した通りである。¹³即ち、大槻玄沢をはじめとする口承情報が過半を占めた『紅毛雑誌』に対して、『万国新話』の場合情報はほとんどが書物からの収集によって成り立っていた。これは、『紅毛雑誌』と『万国新話』の記述対象の相違（『万国新話』の場合には「アジア編」という通りアジア情報であるから、口伝えの情報収集の方がより広範囲をフォローでき、確実であった）に発するところが大きかったわけであるが、ここからも、これらが別々の目的を以て編集されたこと（中良の著作体系の中で異なった系統に在ったこと）を窺知することができる。

『紅毛雑誌』『万国新話』の後に、さらに同様に蘭学書であり海外知識啓蒙随筆である地誌『琉球談』が続くが、これは半紙本一冊という形態からして従前の二作とは異なっていた。また、その内容も、雑纂的な『紅毛雑誌』『万国新話』に比べ、明確な体系を備えた、あくまでも地誌と呼ぶべき書物であった。¹⁴

以上の諸点より、少なくとも『万国新話』が『紅毛雑誌』の続編であったという通説は、否定されるべきである。逆に言えば、

中良のこの分野（海外情報）の本が『紅毛雑誌』『万国新話』『琉球談』までで途絶していることが、『紅毛雑誌』と『万国新話』をあたかも正編・続編のように見せたのであり、後にこれらがセットとなつて売り捌かれたことが、さらにこのような見方に拍車を掛けたと見てよいのであろう。

四、時代的位置づけ

ちなみに、この本を同時代に位置付けるとどうなるだろうか。『紅毛雑誌』は、この類の書物として田沼時代という最も恵まれた環境と条件のもとに生をうけた書物といえ、¹⁵いわば当時の江戸蘭学者たちの知識を包括した、総和的な作品ということができであろう。

その自序に、

此書は、我伯氏（引用者注Ⅱ兄）桂川国瑞法眼 公の御許を蒙りて、春毎に参向する紅毛人の客舎にいたり、薬品の鑑定、蛮書の不審など訳を重ねて討論の暇、蛮人の語りたる雑話に珍かなる事あれば、今日なんかかる奇談を聞たるなんどうちものかたたる、を、唯に聞捨てんもほる（本意）なければ、かりそめなるものに書つけ、又は彼国の書学べる人等の集へる日など、其所に侍りてうち聞たる事をも、筆の随にかきあつめたる雑録にして、もとよりおほやけにすべきものにあらず。しかるを此度申椒堂（須原屋市兵衛）の主のあながちの

需めに応じて、十が「一」を抄出し、紅毛雑話と標題して梓に刻む事とはなりぬ。心を用ゐぬ書き捨の原書のまゝに写したれば、文に雅俗紛雜す。されども誌す所の説においては、いさ、かも虚妄なし。

と綴られていることに典型的に見られるように、『紅毛雑話』は、桂川を中心とする江戸蘭学者の蘭学学習の余瀝とでもいふべき知識の集積と編集とによつて成つたのであつた。いかにも、『雅俗紛雜』すれども「誌す所」に「いさ、かも虚妄」なしと揚言する中良最初の學術書の凡例の第一条だけあつて、ここには彼の本音が吐露されていると考へて大過ないだろう。

「彼国の書學べる人等の集へる日など、其所に待りてうち聞たる事をも、筆の隨にかきあつめたる」という主体が、前からの続きで甫周であるのか、あるいは中良なのか、やや把握しにくい文章ではあるが、これを、杉田玄白が『蘭学事始』に記した「解体新書」訳述の場における甫周の姿に限定する必要はないだろう。それは中良であつてもよく、なぜならば、このような集まりは、すでにこの頃にはいくつも開かれていたのである。

また、「十が「一」を抄出し」とは、話半分としても、『紅毛雑話』に掲載された内容のほかにも「原書」（草稿）が存在したのであることは、『紅毛雑話』に引き続いて『万国新話』が出されているところからも確實である。また、『万国新話』から、『琉球談』に結実する琉球情報のほかにも、朝鮮・蝦夷に関する情報を、「久

しく本朝に属し、世も亦、其の国事を粗と諳んずる故を以て、梓に臨みて之を除く」ということで除外したとは、『琉球談』の序に前野良庵が記すところであつた。これを信するならば、少なくとも『万国新話』の編集段階で、琉球・朝鮮・蝦夷に関する情報は中良によつてまとめられていたのであり、それは、溯つて『紅毛雑話』の時点でかなり明確化していたものと類推される。それらの草稿を背景に、中良は、『琉球談』の巻末予告に見るような、雄大な綱出書シリーズの構想を抱いたのであつただろう。

實際、このような啓蒙書は、この当時寄合の境遇にあつたとしても甫周のなすべきところではなく、その意味で、甫周はまさに小野忠重氏が述べた通り、『紅毛雑話』を皮切りとする啓蒙書で「甫周自身その自ら処するところ、愛弟の進むべき方途を知つて陰に陽にその述作を助けた。おそらくは甫周自身その最もよき代弁者を見出した」⁽¹⁷⁾のであつたと言える。

五、受容

『紅毛雑話』の時代的な位置づけを考えるうえで、この本がどのように受容されたかを瞥見して見たい。『紅毛雑話』の受容の様相は、その板本の移動や、再板の経緯によつてある程度を知ることができ、それはこれまでの考察に譲つて、本稿ではそれ以外の側面から見ておく。

『紅毛雑話』は、さっそく先に中良との関わりを述べた大槻玄

沢の『蘭説弁惑』（天明八年成、寛政十一年刊）に言及される。

のみならず、『蘭説弁惑』自体が、『紅毛雑話』に刺激を受けて成立したのではないかとかつて推測した⁽¹⁸⁾。

同じく天明八年の成立を標榜した『平賀鳩溪実記』（『平賀実記』）にも、『紅毛雑話』に載る飛行船（リュクトストロップ）が引かれる。ただし私見では、『平賀実記』は文政年間頃の成立であったと考えられるので、言及のみしておくこととする。

寛政十二年（一八一〇）七月求板『紅毛雑話』巻末の『星文堂蔵書目録』には、『万国新話 画図ヲ交ヘテ万国ノ珍説ヲ詳クノブル』と記されている。星文堂は、大坂の書店浅野弥兵衛の堂号。『紅毛雑話』の一般的な受容は、ここに述べられた通りに存したものとされる。この時点で（というより当初から）、一般向けには、『紅毛雑話』が『万国の珍説』を盛った本として売り捌かれていたことを窺わせる。

文化五年（一八〇八）、中良晩年のことに与るが、山東京伝作の草双紙（合巻）『松梅竹取物語』の挿絵に、『紅毛雑話』に載る顕微鏡（ミコラスコーピュン）による拡大図が模写されることが知られている。もちろん戯作の挿絵に用いられたのは、『紅毛雑話』の図版ばかりではないが、この本の、より広い層への享受の様相を示している例といえる。ただし、これが、草双紙の読者と、『紅毛雑話』のそれが重ならなかったゆえの操作か、あるいはその逆であるかは、にわかには判断しがたい。

同十二年、「差定帳」（『大坂本屋仲間記録』）の書付には、『紅毛雑話』に関して「阿蘭陀国開闢ヨリ土地風俗其外器物製作等、色々之雜事ヲ平仮名ヲ以和解仕候書」と記されている。『平仮名ヲ以和解仕候書』とは、『平易に解説した本』と理解しておいてよいであろう。

文政十一年（一八一二）に河内屋直助から刊された『紅毛雑話』の後印本に付された蔵板目録に、「此書は紅毛人の物語に聞たる万国の内にあらゆる奇談または蘭書に載る珍説等をしるしたる隨筆なり」と見える。『紅毛人の物語に聞たる』とは甫周の序に基づくものであろう。また「万国の内にあらゆる奇談または蘭書に載る珍説」とは、先の星文堂目録の『万国ノ珍説』云々という惹句を想起させる。また、ここで重要なのは『隨筆なり』との一節である。先に見た通り、同時代人（少なくともその一部）は本書を『隨筆』と捉えていたのである。また別に、『大坂本屋仲間記録』に収まる『板木総目録株帳』の区分によれば、『紅毛雑話』は『万国新話』と並んで、『地誌』の部に収められている。これもまた、当時のジャンル意識に基づく分類であった。

文政十年以降、おそらく天保頃に成立したと思われる木村黙老編『続聞まゝの記』には、『紅毛雑話私考』の一条が含まれ、源内の信泰者であった黙老が、その門人筆頭の代表作である『紅毛雑話』にも興味を抱いていたことが知られる。

天保七年（一八三六）に刊された『近代名家著述目録』（前掲）

には、中良の著書として、十九点を掲出する。実際に板行されたものが十点、写本で伝わった編者が一点、他の九点の内、八点までは板行予告がなされながら予告のみで終わったものであった。その中で、『紅毛雑話』は冒頭に掲げられ、この頃から中良の著作の中でも代表作と目されていたことを示している。

嘉永三年（一八五〇）に至り、『紅毛雑話』の後印本の内、板行された年次の明瞭である最後の板が刊された。先述の通り、『紅毛雑話』と同じ板木を用い、『名勝図会 阿蘭陀紀聞』と改題したものも行なわれたが、これが『紅毛雑話』最後の板以後に改題されたのではなく、『阿蘭陀紀聞』との改題の後に再び、『紅毛雑話』の外題に復して行なわれた可能性の高いことは、先に触れた通りである。

同五年に刊された『西洋学家訳述目録』は、先述の『近代名家著述目録』を参照したことの明らかな目録であったが、『紅毛雑話』は、やはりここでも中良著述七点の冒頭に掲げられている。『近代名家著述目録』『西洋学家訳述目録』の普及度に照らすならば、これらが中良著作の中での『紅毛雑話』の位置づけに大きく関与したことは間違いないであろう。

また、おそらくこの頃、金谷外史訳稿『西説后素小録』（東京大学附属総合図書館酒竹文庫蔵『畧果雜纂』六十二所収）に記された斎藤月岑の識語に、「此書惜むらくは図を脱せり森島中良か編の紅毛雑話の中に西洋の画法とて骨格を載たり合せ考ふべし」

と記された。天明七年（一七八七）の『紅毛雑話』初印本から、七十年ほどが経った時期のことである。

このように、『紅毛雑話』に関して後代に少なからぬ言及を見る事実は、その後摺本や現存本の多さとともに、明白にこの本の流布と受容とが繁かった事実を伝えている。

『紅毛雑話』の翻刻また影印は、江戸科学古典叢書・双林社『紅毛雑話』・生活の古典叢書・文明源流叢書第一などと数多い。後印本も多く、その現存本も多数に及ぶ。手近な『国書総目録』『古典籍総合目録』を繙くだけで、天明七年板が四十一一点、寛政八年板が七点、文化十三年板が二点、文政三年板が一点、同十一年板が一点、刊年不明の板が八点、さらに写本が六点と、板本だけでも計六十点が登載されている。これら以外にも現存本は少なくなく、現在も毎年のように古書市場にあらわれる。

このような流れを汲んで、また、森島中良の事蹟の中でも蘭学者の側面が強調されたことと相俟って、近代以降も『紅毛雑話』は諸書に言及され、森島中良の著述の代表作と目されて来たのであった。

六、おわりに

最後に、『紅毛雑話』に見る中良の論理・論調の内、今後問題となるであろう部分を紙幅の許す限り掲げておきたい。

まず、中良が「唐土の文字」に述べるところは、一種の漢字制

限論であり、漢字廃止論者の態度と発言である。漢字への批判としても、比較的早いころのものとして、また国字論の一つとしても注目してよいだろう。他にも、『紅毛雑話』における言語全般に対する中良の言及・考察は決して少なくはなく、ただしこのような姿勢は、当時の蘭学者たちには珍しい事ではなかった。

例えば『紅毛雑話』の凡例に、「惣て外国の名は。明人の音訳したる文字を用ゆ。さだかならざるものは。片仮字（カタカナ）にて書たり」と中良は明記する。この当時、蘭学に通ずることは、同時に唐音・中国語を学ぶことであつた。そして、カタカナでの国名表記は、当初は（少なくとも中良の用字意識においては）二次的なものであつたことになる。

海外情報啓蒙随筆、即ち従来の考え方によれば純然たる蘭学の範疇にありながら、『紅毛雑話』の跋文は純粋な和文（擬古文）である。かつて少し考察したように、⁽²⁰⁾ 蘭学者の国学的素養という問題以前に、本草学者・名物学者と重なるところの大きい蘭学者という文人の素養、むしろその嗜みが自然に提示された部分と言えるだろう。特に江戸蘭学において、このような学際派が輩出したのであり、それは、江戸というトポスのもつ重層的な、あるいは先端的な（学問もまた流行現象である）位相と無縁ではなく、近世中期以降の錯綜した知的・学的状況がもたらした現象でもあつた。本草学が百科全書的な知識を志向するとき、それはおのずから蘭学を包摂するのであつて、国学が国学なりの方法で百科

全書的な知的大系を築こうとするとき、その（国学と蘭学との）内包は大きく重なりあつたのである。国学が現在の学的領域で呼ばば、国文学・国語学のみならず歴史学・言語学・民族学・民俗学・生物学などの諸分野を包摂していたことに對し、蘭学もまたいうまでもなく総合科学として存在した。このような現象は、一方通行的であつたのではなく、国学の領域と相互乗り入的に發生し、展開したものと云つてよい。

この他、『紅毛雑話』の内包は、実にさまざまな問題に満ちており、改めて稿を構える必要を感じる。

『紅毛雑話』の同時代的な価値の第一は、繰り返し述べて来たような啓蒙性にあつたはずである。また、天明七年という時期に鑑みるならば、これは、江戸蘭学が生み出した類書の系譜の中でも先駆的な業績であつた。おそらく、『紅毛雑話』のもつ様々な価値の中で、これら二つが最大のものではないかと考えられる。

これまで実にさまざまな機会に言及されて来た『紅毛雑話』であるが、その内容的な検討と位置づけ（蘭学の中で、同時代的な書物の中で、森島中良の事蹟の中で、一般的蘭学知識普及の中で）の検討・解明は、まだこれからの問題と云つてよい。『紅毛雑話』や『万国新話』の知名度を高めた小野忠重氏による先駆的な翻刻（『紅毛雑話』双林社、一九四三年）は、既にこの本自体が稀覯に属し、一方で杉本つとむ氏による手堅な影印本（生活古典叢書『紅毛雑話・蘭説弁惑』八坂書房、一九七二年）もまた絶版によつ

て現在入手困難となっている現状は、その意味でも残念である。余言を付しておくならば、既に稀観書となって久しい小野忠重氏の名著『紅毛雑話』の復刻されんことを切に祈るものであり、杉本氏の後注を拡充して、より適切かつ懇切な注記と解題を備えた『紅毛雑話』の翻刻が刊されることを期待したい。それらは、森島中良研究のみならず、江戸蘭学研究にとっても重要なエポックを改めて形づくるに相違ないと思われるからである。

注

- 1 『近代名家著述目録』（天保七年刊）、『西洋学家訳述目録』（嘉永五年刊）以下、関場不二彦『西医学東漸史話』（吐鳳堂書店、一九三三年）、岡村千曳『紅毛文化史話』（創元社、一九五三年）など。
- 2 例えば、文政十一年（一八二八）に、河内屋直助から刊された『紅毛雑話』の後印本に付された蔵板目録に、「此書は紅毛人の物語に開たる万国の内にあらゆる奇談または蘭書に載る珍説等をしるしたる随筆なり」などと見える。
- 3 小野忠重『紅毛雑話』（双林社、一九四三年）による。
- 4 「転向」の語は、森島中良に関して用いられたことはなく、師匠平賀源内に準えて使用した。中良の事蹟中にこの呼称を象徴するならば、戯作の筆を絶ち學術書の著述を中心とするに至る天明七年、もしくは白河藩仕官の寛政四年を以て呼ぶべきであろう。
- 5 『紅毛雑話』の諸板については、拙稿「森島中良の著作における江戸と上方——出版システムの問題を中心に——」（大阪商業大学

比較地域研究所『地域と社会』創刊号、一九九九年）、及び「近世大坂書林の江戸板取扱窺見——森島中良の著作を軸に——」（『同前』『地域と社会』第二号、一九九九年）において考察した。

6 注5の拙稿「近世大坂書林の江戸板取扱窺見」参照。

7 拙稿「森島中良と大槻玄沢——江戸蘭学者の交友一斑」（『洋学資料による日本文化史の研究』Ⅵ、一九九三年。拙著『万葉亭森島中良の文事』翰林書房、一九九五年所収）参照。

8 今田洋三氏は、松平定信による「言論統制」と説かれる（『江戸の本屋さん（NHKブックス）』日本放送協会、一九七九年）。

9 注3の「森島中良雑考」。また、『国書総目録』は「万国新話」を「紅毛雑話の続編」と明記している。

10 森島中良のジャンルによる号の使い分けについては、注7の拙著『万葉亭森島中良の文事』第一章第二節などで論じた。

11 注5の拙稿「近世大坂書林の江戸板取扱窺見」参照。

12 五冊に巻一から巻五までの巻次を当てる『紅毛雑話』に対して『万国新話』は首巻を置き、二冊目の巻一から巻四までの五巻という相違がある。『万国新話』の情報量の不足を、余儀なくこのような形で糊塗したか、別に何らかの意図があったかは、次の『琉球談』が全一卷であつて、ここで中良による同類の書の刊行が途切れているので、現在のところ判断し難い。

13 注7の拙著第二章第七節「大槻玄沢との交友」参照。

14 拙稿「琉球談」の背景——成立・差構・人的運関など」（『大阪商業大学論集』第一一五号、一九九九年）参照。

15 杉本つとむ氏「森島中良」（『江戸時代 蘭語学の成立とその展開』Ⅲ、早稲田大学出版会、一九七八年）参照。

- 16 拙稿「森島中良編『琉球談』の考察」(『洋学資料による日本文化史の研究』Ⅳ、一九九六年) 参照。
- 17 注3の『紅毛雜話』所収「森島中良雜考」。
- 18 注13に同じ。
- 19 鈴木重三「繪本と浮世絵」(美術出版社、一九七九年) など。
- 20 注13に同じ。

(いしがみ さとし・大阪商業大学助教授)

研究室受贈圖書雜誌目錄(五)

- 語学と文学(群馬大学語文学会) 三四、三五
- 国語学研究(東北大学文学部「国語学研究」刊行会) 三八
- 国語国文学(福井大学国語国文学会) 三八
- 国語国文学(目白学園女子短期大学国語国文科研究室) 八
- 国語国文研究(北海道大学文学部国語国文学会) 一一一、一二二、一三三
- 国語国文論集(安田女子大学日本文学会) 二九
- 国語表現研究(国語表現研究会) 一二一
- 国際児童文学館紀要(大阪国際児童文学館) 一四
- 国文(お茶の水女子大学国文研究室国語国文学会) 九〇、九一
- 国文学(関西大学国文学会) 七八、七九
- 国文学科報(跡見学園女子大学国文学科) 二七

- 国文学研究(早稲田大学国文学会) 一二七、一二八、一二九
- 国文学研究資料館紀要(国文学研究資料館) 二五
- 国文学研究ノート(神戸大学文学部国語国文学会「研究ノート」の会) 三三、三四
- 国文学攷(広島大学国語国文学会) 一五八、一五九、一六〇、一六一
- 国文学論叢(龍谷大学国文学会) 四四
- 国文研究(熊本県立大学国文談話会) 四四
- 国文白百合(白百合女子大学国語国文学会) 三〇
- 国文談話会会報(熊本県立大学国文談話会) 三四
- 国文目白(日本女子大学国語国文学会) 三八
- 国文論叢(神戸大学文学部国語国文学会) 二七、二八
- 古代研究(早稲田古代研究会) 三三
- 古代文学研究(名古屋女子大学古代文学研究会) 二一八
- 語文(大阪大学国語国文学会) 七二
- 語文(日本大学国文学会) 一〇三、一〇四
- 語文研究(九州大学国語国文学研究会) 八六、八七
- 語文と教育(鳴門教育大学国語教育学会) 一二、一三
- 語文論叢(千葉大学文学部国語国文学会) 二六
- 駒沢国文(駒沢大学文学部国文学研究会) 三六
- 相模国文(相模女子大学国文研究会) 二六
- 実践国文学(実践国文学会) 五五、五六